

クロアチアにおける歴史教育と近代史

History Education in Croatia and Modern History

石田 信一

Shinichi ISHIDA

要旨

旧ユーゴスラヴィア連邦から分離・独立したクロアチアの学校向け歴史教科書における近代史に関する記述の変化を、一九八〇年代末までの連邦時代、独立直後の一九九〇年代、新たな学習指導要領が導入された二〇〇六年以降の三期に分けて詳細に辿りつつ、その特徴と問題点を明らかにした。共産主義者同盟による一党独裁体制下にあった連邦時代においてさえ、クロアチアの歴史教科書は世界史(主にヨーロッパ史)、クロアチア史、その他のユーゴスラヴィア諸民族史の三層構造となっており、「国民史」的側面を持っていたが、必ずしもクロアチア史に関する記述の比率は高くなく、諸民族の融和を意図してユーゴスラヴィア主義思想)や「民族体」への言及などの特別な配慮が見られた。しかし、連邦解体に伴

う激しい「内戦」を経験した一九九〇年代の歴史教育・教科書は「国民史」一辺倒のものに変貌し、「狭隘な民族的歴史観」を押し付けるものとなった。それが近隣諸国間の不和を助長した面もある。最近では、近隣諸国との教科書対話などを通じて、かつてほど極端な記述は見られなくなり、「クロアチア国家(国民)教育基準」に基づく新たな学習指導要領の下で教科書の記述のあり方も多様化している。それでも、文化史・社会経済史に関する記述や「少数民族」に関する記述など、さらに改善すべき点も少なくない。クロアチアを含む旧ユーゴスラヴィア諸国において現在進行中の歴史教育・教科書の改善策は、同じように歴史教科書問題を抱える日本にとっても参考にすべき点があると思われる。

はじめに

歴史教科書の記述や歴史認識・解釈をめぐって近隣諸国間に不和を生じさせる歴史教科書問題は、日本を含む東アジアに特有の現象ではない。ヨーロッパでは、早くからドイツがフランスやポーランドと「国際教科書対話」¹⁾を進めて問題解決を試みてきたし、最近邦訳も刊行された「ドイツ・フランス共通歴史教科書」²⁾はその成果の一つであると考えられる。³⁾

一九九〇年代に連邦解体過程で激しい「内戦」を経験した旧ユーゴスラヴィア諸国の場合、歴史教科書にはエスノセントリックで不和を助長する「国民史」一辺倒の記述がなされてきた。現在、教科書対話などを通じて、かつてほど極端な記述は見られなくなりつつあるが、なお多くの課題を抱えている。

本稿では、そうした課題を抱える国の一つとして、一九九一年に旧ユーゴスラヴィア連邦から分離・独立したクロアチアを取り上げ、同国における歴史教育の特徴と問題点を、とくに学校向け歴史教科書における近代史に関する記述の変化を辿りつつ説明していく。現代史に関する記述のほうに劇的な変化が見られるものの、専門的な研究領域においても位置づけが未確定であることが多いため、本稿ではあえて対象から除外する。また、必要に応じて他の旧ユーゴスラヴィア諸国における歴史教育・教科書との比較研究も試みたい。

クロアチアの学校制度および歴史教育の歴史に関する先行研究は必ずしも多くない。通史的に概観するためには『クロアチア学校・教育史』⁴⁾

が役立つが、社会主義体制下の学校制度が確立した一九六〇年代以降は含まれないので、各学校の記念出版物（代表例は『ザグレブ古典ギムナジウムの歴史（四〇〇周年）』、『スプリト神学校・古典ギムナジウム三〇〇周年論集』⁵⁾）や同時代文献、雑誌『教育史年報』⁶⁾等で補う必要がある。体系化が待たれる。現在の学校制度およびカリキュラム全般に関しては教科書出版社などから幾つかの解説書が出ているほか、科学・教育・スポーツ省が随時発行する小冊子も有用である。

近年のクロアチアの歴史教育・教科書問題に関しては、すでに一九九〇年代半ばからヴォルフガング・ヘプケンの研究があったが、二〇〇〇年前後から『歴史教育』⁹⁾などの雑誌や、国際会議の成果をまとめた『歴史家対話』¹⁰⁾、『バルカンのクリオ』¹¹⁾、『クロアチアの民主的転換』¹²⁾などの論文集が相次いで刊行されている。とくにスニエジャナ・コレン、マグダレナ・ナイバル・アギチチ、ダミル・アギチチ、トヴルトコ・ヤコヴィナら自ら歴史教科書の執筆に携わっているザグレブ大学史学科を拠点とする研究者が非常に多角的な視野から歴史教科書の記述内容の分析を行っている。とくにコレンにはマイノリティの記述に関する分析を含めて非常に多くの研究成果がある。¹³⁾また、アレックス・ペラミーやゴルダナ・ウゼラツのように、クロアチア人のナシヨナリズムやアイデンティティを分析する素材として歴史教育・教科書を取り上げるケースも多い。¹⁴⁾

クロアチアにおける歴史教育・教科書問題に関して、日本では拙稿「クロアチアにおける歴史教育と歴史教科書」等を除けば、ほとんど先行研究がない。¹⁵⁾しかし、より大きな枠組みで、バルカン諸国ないし旧ユーゴ

スラヴィア諸国の歴史教育・教科書を比較・分析する試みとして、柴宜弘氏の諸研究がある。¹⁶⁾ 同氏は関連テーマで国際シンポジウムを企画し、¹⁷⁾ その成果を『バルカン史と歴史教育』として刊行している。¹⁸⁾ 本稿は、クロアチアと近隣諸国の歴史教育・教科書の比較・分析を通じて、上記のプロジェクトではなお考察が不十分であった点を取り上げ、新たな論点を提示しようとする試みでもある。

一 学校教育制度の変遷と歴史教育の歩み

ユーゴスラヴィア連邦時代、すべての共和国・自治州で統一的な学校教育制度が適用されており、クロアチアも例外ではなかった。第二次世界大戦後まもなくの混乱期を経て、初等教育（義務教育）八年間、中等教育四年間の学校教育制度が確立したのは、一九五〇年代末から六〇年代初頭にかけてのことであった。クロアチアを含む多くの旧ユーゴスラヴィア諸国では、現在でもこの制度が維持されている。もっとも、近年スロヴェニアやモンテネグロでは初等教育が九年間に延長されており、クロアチアでも中等教育の一部を義務教育に含める改革案が提示されるなど、かつての統一性は失われる傾向にある。

初等教育機関は小学校（八年制）のみであるが、中等教育機関は一般教育を行うギムナジウム、細分化された職業教育を中心とする専門学校、音楽・ダンス・美術などに特化した芸術学校の三種類に区分されている。さらに専門学校の場合は必ずしも四年制とは限らず、専門（職業）

分野に応じて二年間ないし三年間で修了するプログラムも用意されている。これらのプログラムは各職業分野の基礎資格を付与するものとなっている。

一九六〇年代から七〇年代半ばにかけて、小学校レベルでの「歴史」教育は六年次から八年次の三年間を通じて週二時間ずつ行われ、六年次で「導入」「先史時代」「奴隷所有制の社会」「中世ヨーロッパ」、七年次で「封建制度の崩壊と新時代の幕開け」「外国支配下の我が民族と外国支配への抵抗」「市民階級と新時代の政治権力への闘い」「一九世紀における労働運動の発展」「帝国主義」「一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけての我が民族」、八年次で「第一次世界大戦とロシア革命」「第一次世界大戦後の世界」「新たな世界大戦への道」「第二次世界大戦と人民解放闘争」などを学ぶこととなっていた。¹⁹⁾ 教科書は三分冊（過去と現在「シリーズ」で、ザグレブのシュコルスカ・クニガ社が出版している。²⁰⁾ なお、この時期には、小学校一年次から三年次まで「自然と社会」（一年次・二年次では週三時間、三年次では週四時間）、四年次から五年次まで「社会知識」（週三時間）、六年次から八年次まで「地理」（週二時間）が設けられており、そこでも歴史の基礎を学びうる構造となっていた（とくに郷土史など）。このほか、八年次には「社会・道徳教育基礎」（週一時間）が設けられていた。

続いて、一九七〇年代半ばから、初等学校レベルでの「歴史」教育は五年次から八年次の四年間に延長された（五年次では週一時間、六年次から八年次までは週二時間）。單元ごとに見込まれる最低限の時間数は次

の通りであった。五年次では「導入」二時間、「初期の共同体における人々の生活」三時間、「古代の諸民族の文化」一五時間。六年次では「五世紀から一二世紀にかけてのヨーロッパ」七時間、「九世紀から一二世紀にかけての南スラヴ人」七時間、「一二世紀から一五世紀にかけてのヨーロッパ」二時間、「一二世紀から一五世紀末までの南スラヴ人」一二時間、「人文主義とルネサンス」三時間、「一六世紀から一八世紀末までの南スラヴ人」九時間。七年次では「フランス革命からパリ・コミューンまでの市民社会」七時間、「一九世紀における南スラヴ諸民族の民族運動」一二時間、「一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての世界」三時間、「一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけての南スラヴ諸民族」一一時間、「第一次世界大戦、ロシア革命、南スラヴ諸民族の統一」七時間。八年次では「戦間期の世界」四時間、「戦間期のユーゴスラヴィア諸民族」五時間、「第二次世界大戦、ユーゴスラヴィア諸民族の解放闘争と社会主義革命」二二時間、「第二次世界大戦後の世界」五時間、「社会主義ユーゴスラヴィアの発展」五時間、「二〇世紀の世界と我々の科学・技術・文化」二時間。²¹ 教科書は四分冊（当初は『人々の空間と時間』シリーズ、八〇年代半ばからは『人と時代』シリーズ）で、同じくシュコルスカ・クニガ社が出版している。²²

この時期には、「自然と社会」は一年次から四年次までの科目（一年次・二年次では週三時間、三年次・四年次では週四時間）、「地理」は五年次から八年次までの科目（「歴史」と同じく五年次では週一時間、六年次から八年次までは週二時間）となり、従来の「社会知識」および「社

会・道徳教育基礎」は廃止された。

一方、中等教育機関、とくにギムナジウム（四年制）では当初から「歴史」を詳しく学ぶ機会が設けられており、一九七〇年代初頭までに教科書は四分冊に整えられた。²³ 三年生向け教科書が「一八世紀のブルジョア革命」から「帝国主義の時代」に至る近代史を対象としており、『一九世紀』というタイトルが付されていた。しかし、一九七〇年代半ばの教育改革を通じて、ギムナジウムは廃止され、中等教育機関は普通中等学校に一本化される一方、共通の基礎課程（二年間）と多岐にわたる専門課程（一年間または二年間）に二分された。²⁴ 「歴史」は基礎課程の必修科目の一つであり、当初二年間にわたり週二時間ずつ実施されることとなった。教科書は二分冊で、第一巻は古代から一九世紀半ば（ヨーロッパ史は一八七一年のパリ・コミューン、クロアチア史は一八六七年のナゴドバ）まで、第二巻はそれ以降の近代史を対象としていた。²⁵ そのため、従来の教科書では一冊で完結していた近代史の叙述が中途半端に分割される結果となっている。また、中等教育における「歴史」教科書が合算しても五〇〇頁程度しかないのは、クロアチアの歴史教育史においては異例のことである。なお、この時期のカリキュラムにおいては、社会Ⅱ経済的分野の科目として「歴史」（二年間で四時間）と「地理」（同四時間）のほかに「マルクス主義の基礎」（同二時間）と「自主管理社会主義の理論と実践」（同三時間）が設けられていたことが注目される。²⁶

一九五〇年代以降、クロアチア全土で四〇〇校前後から六〇〇校前後へと漸増傾向にあった中等学校は、上記の改革を通じて統廃合の対象と

なり、八〇年代初頭には二二二校にまで激減した。⁽²⁷⁾このラディカルな教育改革には批判も多く、一九九〇年代初頭までにクロアチアを含むすべての共和国・自治州で廃止された。それに伴い、一九九〇年度には二二九校しかなかったクロアチアにおける中等教育機関は、九一年度には四六一校に急増し、独立後の九二年度には四九二校となった。その内訳は、ギムナジウムが一二二校、専門学校が三五一校、芸術学校が一八校であった。⁽²⁸⁾二〇〇七年度には、小学校が二〇七三校、中等学校が六七四校となり、そのうちギムナジウムは一七一校に達している。⁽²⁹⁾

二 教科書における近代史(1) ユーゴスラヴィア連邦時代

続いて、クロアチアの歴史教科書における近代史に関する記述の変化を、旧ユーゴスラヴィア連邦(社会主義)時代、独立直後のナシヨナリズム高揚期、そして現在(二〇〇六年度に「クロアチア国家(国民)教育基準」が導入されてから)の三期に分けて、詳しく分析していくことにする。主として小学校七年生向け教科書を分析の対象とするが、必要に応じて同時代の中等学校(ギムナジウム)向け教科書も参照する。

ユーゴスラヴィア連邦時代においても、歴史教科書は各共和国単位で出版され、その内容は不統一であった。多くの場合、ヨーロッパ史(あるいは世界史)、当該共和国・民族の歴史、その他の連邦構成共和国・民族の歴史の三層構造となっており、独立後に顕在化する「国民史」の側面は早くから内在していたと言える。例えば、一九八〇年代末のクロア

チアおよびセルビアの小学校七年生向け歴史教科書の構成は以下の通りであった。⁽³⁰⁾

- ①クロアチアの教科書(一九八六年、本文二二二頁)
- 〈導入〉(二頁)
- 〈産業革命からパリ・コミューンまでの経済と社会〉(二頁)
- ・産業革命と労働者階級(六頁)
- ・最初のブルジョワ革命とアメリカ合衆国の建国(四頁)
- ・フランスのブルジョワ革命(八頁)
- ・ナポレオン時代(七頁)
- ・マルクス、エンゲルスと第一インターナショナル(五頁)
- ・一八四八〜四九年のヨーロッパにおける革命的諸事件(五頁)
- ・パリ・コミューン〜最初のプロレタリア国家(五頁)
- 〈一八世紀末から一九世紀半ばにかけてのユーゴスラヴィア諸民族〉(二頁)
 - ・一八世紀末から一九世紀前半にかけてのクロアチア諸邦(一三頁)
 - ・一八四八〜四九年のクロアチアにおける革命的变化とその結果(六頁)
 - ・スロヴェニア民族再生(五頁)
 - ・南ハンガリー・ヴォイヴォディナにおける我々が民族(六頁)
 - ・独立セルビア国家への闘争(九頁)
 - ・モンテネグロの独立闘争(六頁)

・一八七〇年代に至るトルコ支配下の諸邦 (六頁)
 〈帝国主義の草創期の世界〉 (二頁)

- ・第二次産業革命 (六頁)
- ・帝国主義と世界分割競争 (四頁)
- ・労働者階級の権利闘争 (五頁)

〈一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけてのユーゴスラヴィア諸民族〉 (一頁)

- ・オーストリアとハンガリーの間のクロアチアとクロアチアとハンガリーのナゴドバ (九頁)
- ・近代クロアチアの形成と第一の民族運動 (六頁)
- ・一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのクロアチア諸邦と第二の民族運動 (一〇頁)
- ・スロヴェニア人の文化的・政治的統一闘争 (六頁)
- ・トルコ帝国衰亡期のボスニア・ヘルツェゴヴィナ (一〇頁)
- ・一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのヴォイヴォディナ (六頁)
- ・セルビア独立国家 (七頁)
- ・一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのモンテネグロ (五頁)
- ・マケドニア人の自由・統一闘争 (五頁)
- ・第一次世界大戦前の我々が民族 (六頁)
- ・ユーゴスラヴィア思想の発達と第一次世界大戦前の民族問題 (六頁)
- ・ユーゴスラヴィアの民族体による民族運動と再生 (六頁)

〈第一次世界大戦、一〇月革命、ユーゴスラヴィア諸民族の統一〉 (二頁)

- ・第一次世界大戦 (一〇頁)
- ・一〇月革命 (九頁)
- ・ユーゴスラヴィア諸民族の統一のための闘争 (九頁)
- ・第一次世界大戦後の世界情勢 (六頁)

②セルビアの教科書 (一九八七年、本文一八二頁)

〈一八世紀末から一九世紀初頭にかけてのヨーロッパと世界〉

- ・一八世紀末における資本主義経済の進展 (四頁)
- ・アメリカ合衆国の独立戦争と建国 (三頁)
- ・フランス・ブルジョワ革命 (一七八九～九四年) (五頁)
- ・一七九四年から一八一五年までのヨーロッパとフランス (五頁)
- ・労働・社会主義運動の始まり (四頁)
- ・マルクスとエンゲルスの社会主義の教え (四頁)
- ・共産党宣言 (三頁)

〈一九世紀前半の南スラヴ人と隣人たちの民族運動〉

- ・一八世紀末から一九世紀前半にかけてのオスマン帝国情勢と第一次セルビア蜂起の始まり (五頁)
- ・一八〇七年から一三年までの第一次セルビア蜂起 (四頁)
- ・第二次セルビア蜂起と自治国家の発展 (六頁)
- ・モンテネグロ国家の形成と発展 (四頁)

- ・一八世紀末から一九世紀前半にかけてのトルコ支配下のボスニア・ヘルツェゴヴィナ（五頁）
 - ・マケドニア人の民族再生の始まり（四頁）
 - ・一八世紀末から一九世紀初頭にかけてのハプスブルク帝国（オーストリア）（五頁）
 - ・一九世紀前半のハンガリーにおけるセルビア人（五頁）
 - ・一九世紀前半のスロヴァキア人・ルテニア人・ルーマニア人の民族運動（五頁）
 - ・スロヴェニア人の民族再生（三頁）
 - ・イリリア運動（四頁）
- 〈ヨーロッパ、南スラヴ人と隣人たちの一八四八〜四九年革命〉
- ・ヨーロッパにおける一八四八〜四九年革命（六頁）
 - ・一八四八〜四九年革命におけるユーゴスラヴィア諸民族と隣人たち（六頁）
- 〈一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけての世界〉
- ・一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけての資本主義経済のさらなる発展（四頁）
 - ・第一インターナショナル（四頁）
 - ・パリ・コミューン（四頁）
 - ・第二インターナショナル（四頁）
 - ・一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての国際関係（五頁）
- 〈一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての南スラヴ人と隣人たち〉
- ・一八五八年から一八七八年までのセルビア（四頁）
 - ・一八七八年から一九〇三年までのセルビア（四頁）
 - ・一九〇三年から一九一四年までのセルビア（五頁）
 - ・一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけてのモンテネグロ（四頁）
 - ・一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのマケドニア人の民族・革命運動（四頁）
 - ・一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのオーストリア＝ハンガリーの民族問題（四頁）
 - ・一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのスロヴェニア人（三頁）
 - ・オーストリア＝ハンガリー協定（アウスタリヒ）以降のクロアチア（四頁）
 - ・一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけてのヴォイヴォディナ（四頁）
 - ・オーストリア＝ハンガリー統治下のボスニア・ヘルツェゴヴィナ（五頁）
 - ・一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのルーマニア人とスロヴァキア人（五頁）
 - ・一九世紀から二〇世紀初頭にかけてのブルガリア人（三頁）
 - ・一九世紀から二〇世紀初頭にかけてのアルバニア人の民族運動（三頁）
 - ・一九世紀から二〇世紀初頭にかけてのユーゴスラヴィア思想の出現と発展（四頁）

（一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのユーゴスラヴィア諸邦における労働運動）

・我が諸邦における労働運動の発展（六頁）

・一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのセルビアにおける労働・

社会主義運動（五頁）

・ヴォイヴォディナにおける労働運動（四頁）

このように、クロアチアとセルビアの教科書はほぼ同時代を扱いながら（第一次世界大戦を含むか否かの違いはある）、その構成はかなり異なる印象を受ける。いずれも社会主義体制下の教科書として労働運動・社会主義運動に重点を置いているが、とくにセルビアの教科書のほうがより多くの頁数を割いていることが明白である。

クロアチアとセルビアの教科書を比較すると、各教科書でのヨーロッパ史（あるいは世界史）に該当する部分は、前者が八五頁（三七％）、後者が五五頁（三〇％）と、クロアチアのほうが高い比率となっているのに対し、当該共和国・民族の歴史（いわゆる「国民史」）に該当する部分は、前者が四四頁（一九％）、後者（ヴォイヴォディナを含む）が四六頁（二五％）と、セルビアのほうが高い比率となっている。その他の連邦構成共和国・民族の歴史に該当する部分（ユーゴスラヴィア全般に関わる記述を含む）は、前者が一〇〇頁（四三％）、後者が八一頁（四五％）と、ほぼ同率となっている。なお、クロアチアの教科書におけるセルビア史（ヴォイヴォディナを含む）の記述が二八頁（一二％）に達しているのに

対して、セルビアの教科書におけるクロアチア史の記述は八頁（四％）に過ぎないことから、記述分量の不均衡が指摘できる。

ユーゴスヴィア思想の発達に関しては、クロアチアの教科書は「ユーゴスラヴィア国籍を持つ我が国のすべての住民はユーゴスラヴィア人である。それは、彼らがユーゴスラヴィア国民であることを意味する。狭い意味でのユースラヴィア人とは、南スラヴ諸民族、すなわちセルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人、ムスリム人、マケドニア人、モンテネグロ人のことである。住民の大多数が南スラヴ人であるため、我が国はユーゴスラヴィア社会主義共和国連邦と呼ばれる」という前提から始まり、クリジャニチ、ヴィテゾヴィチ、ガイ、ククリエヴィチからシユトロスマイエル、ラチュキに至るスラヴ思想ないし南スラヴ（ユーゴスラヴィア）思想の系譜を紹介する一方で、それが必ずしも多くの人々に受け入れられたわけではなく、とくにクロアチア人とセルビア人の間では「大クロアチア主義」や「大セルビア主義」に至る独自のナショナリズムが発達し、いわゆる民族問題が顕在化したことにも触れている。

なお、一九七〇年代の学習指導要領には「ユーゴスラヴィア思想の発達と第一次世界大戦前の民族問題」という単元自体が存在せず、追加的な記述となっている。一方、セルビアの教科書の記述はより簡潔なものとなっているが、「ユーゴスラヴィア連邦国家に民族問題の解決を見出していた」スロヴェニア人の作家ツァンカルのように、社会主義者の間でユーゴスラヴィア思想が支持されていたことを強調しているのが特徴的である。

ユーゴスラヴィア国内の「民族体」(原語ではナロードノスト。実質的には主要民族「ナロードとしての地位を得られないマイノリティ)および彼らの本国に関する記述は、クロアチアの教科書が六頁(三%)、セルビアの教科書が一六頁(九%)と大きな違いがある。セルビアの教科書が「隣人たち」という枠組みを用いてセルビア国内の「民族体」でもあるアルバニア人、ハンガリー人、ルーマニア人、ブルガリア人、スロヴァキア人などの動きを比較的詳しく描いている。この時期の政治指導者や文学者の肖像画が、各「民族体」一々二名ずつ掲載されている。これに対して、クロアチアの教科書は「今日、ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国には六つのユーゴスラヴィア〔南スラヴ〕民族が住んでいる。

クロアチア人、セルビア人、ムスリム人、スロヴェニア人、マケドニア人、モンテネグロ人である。彼らとは別に、大半は他の地域に自らの国民国家を持つものの、数百年にわたり我が国に住んでいる、近隣その他の民族の一部分も、我々の共同体の平等な構成員となっている。我々の民族とは区別して、民族体と呼んでいる。アルバニア人、ハンガリー人、トルコ人、スロヴァキア人、ロマ人、ルーマニア人、ヴラフ人、ブルガリア人、チェコ人、イタリア人、ウクライナ人、ルシン人、ポーランド人、ロシア人、ギリシア人、ユダヤ人、その他である。…他国では民族体は少数民族と呼ばれ、いかなる民族的権利も享受していないことも多い。我々は少数民族という概念を用いない。なぜなら、民族体の構成員もユーゴスラヴィア諸民族と同権だからである」と記されており、「民族体」の位置づけを強調しているように見える。しかし、彼らと関わり

のある近隣諸国・諸民族の歴史については、セルビアの教科書と比べても、ごく簡潔にしか記述されていない。とくに近代史においては、ハンガリー人やイタリア人など「敵対者としてのユーゴスラヴィア周辺の隣人たちが描かれた」という指摘もある。³⁴⁾

クロアチアにせよセルビアにせよ、この時期の教科書には文化的記述がほとんど無い。スニエジャナ・コレンは「一九九〇年以前に存在した第一のモデルでは、ほとんど政治史一辺倒の膨大な量の事実が相互の関連性を欠いたまま与えられていた。生徒はそれに圧倒されてしまい、結果このモデルは不成功に終わった」と評している。³⁵⁾

三 教科書における近代史(2) 一九九〇年代

一九九〇年四月、クロアチアで第二次世界大戦後初めてとなる複数政党制自由選挙が実施されると、右派のクロアチア民主同盟(HDZ)が大勝し、旧共産主義者同盟に代わって共和国における実権を掌握した。HDZ政権が脱「社会主義」政策を推進しただけでなく、自らの主張してきたクロアチア民族主義を「クロアチア語」や「歴史」などの科目に反映することを求めたため、学習指導要領や教科書は抜本的な改変を余儀なくされた。一九九一年六月にクロアチアがスロヴェニアと同時にユーゴスラヴィア連邦からの分離・独立を宣言してからは、その傾向に拍車がかかった。この時期に確立した新たな学校教育制度では、小学校は従来通りの八年制、中等学校は二〜四年制となり、前述の通り、ギムナ

ジウムと専門学校の区別が復活した。「歴史」は小学校で四年間(従来通り五年次で週一時間、六、八年次で週二時間、教科書は四分冊)、ギムナジウムで四年間(標準で週二、三時間、教科書は四分冊)、専門学校で一、三年間(標準で週二時間、教科書は一、二分冊)学ぶこととされた。

独立後数年を経て、一九九五年に導入された新たな学習指導要領に基づいて執筆された歴史教科書はヨーロッパ史(あるいは世界史)、クロアチア共和国・民族の歴史(クロアチア国民史)に加えて、その他の旧ユーゴスラヴィア連邦構成共和国・民族の歴史を「アルプス・バルカン地域」に包含して、⁽³⁶⁾ごくわずかに取り上げるだけの三層構造となった。そのこともあって、総頁数がほぼ半減しており、「国民史」の突出ぶりが目につく。スニエジャナ・コレンは「他のものをすべて締めだす狭隘な民族的歴史観」⁽³⁷⁾をもたらすものとして、このモデルを批判している。一九九六年には教科書の多元化(複数化)が始まったものの、取り上げるべき内容と方向性を学習指導要領が細部まで指示しているため、独自性を打ち出すのは困難であった。⁽³⁸⁾この時期の小学校七年生向け歴史教科書の「単元」および主要教科書における記述分量(頁数)は以下の通りであった(①はアルファ社、②はプロフィル社、③はシユコルカ・クニガ社のもの)。⁽³⁹⁾アルファ社の教科書は学習指導要領の「単元」を忠実に反映しているが、プロフィル社とシユコルスカ・クニガ社の教科書は「単元」名を一部変えており、例えばプロフィル社では「セルビア公国の大セルビア主義政策とモンテネグロ」に該当するものは「一八世紀末から一九世紀前半にかけてのセルビアとモンテネグロ」となっている。

〈一八世紀半ばから一九世紀半ばにかけての世界〉(①一頁、②二頁、③四頁)

③四頁)

・第一次産業革命(①四頁、②三頁、③四頁)

・アメリカ合衆国の発展(①二頁、②三頁、③四頁)

・フランス革命(①三頁半、②四頁、③二頁)

・フランス革命と一七九四年までの動き(①二頁、②三頁、③二頁)

・ナポレオン戦争(①三頁半、②四頁、③四頁)

・新たな社会階層と社会問題(①二頁、②三頁、③四頁)

・ヨーロッパにおける革命的諸事件(一八一五～四九年)(①三頁、②四頁、③四頁)

②四頁、③四頁)

〈一八世紀半ばから一九世紀半ばにかけてのクロアチア〉(①一頁、②二頁、③四頁)

・クロアチアにおける啓蒙絶対主義とその帰結(①四頁、②四頁、③二頁)

③二頁)

・ナポレオンのダルマチア・イストリア占領とその支配の終焉(①三頁半、②四頁、③四頁)

・再生前夜の経済・社会情勢(①四頁半、②四頁、③四頁)

・再生期のクロアチアの政治的地位(①二頁、②四頁、③四頁)

・再生期とその成果(一八三五～四八年)(①四頁、②五頁、③六頁)

・一八四八年前夜のクロアチア情勢(①二頁、②三頁、③四頁)

・一八四八年前夜のクロアチア情勢(①二頁、②三頁、③四頁)

・一八四八年前夜のクロアチア情勢(①二頁、②三頁、③四頁)

・一八四八年前夜のクロアチア情勢(①二頁、②三頁、③四頁)

- ・ ヨシブ・イエラチチ総督と一八四八年のクロアチア議会(①二頁、②二頁、③四頁)
 - ・ ハンガリー覇権主義への抵抗(①三頁、②四頁、③四頁)
- 〈二世紀末から一九世紀半ばにかけてのアルプス・バルカン地域〉
- (②二頁、③四頁)
 - ・ スロヴェニア人の再生(①二頁、②三頁、③二頁)
 - ・ 南ハンガリーのクロアチア人その他の民族(①二頁、②三頁、③二頁)
 - ・ ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおけるクロアチア人その他の民族(①二頁、②三頁、③四頁)
 - ・ セルビア公国の大セルビア主義政策とモンテネグロ(①二頁、②三頁、③二頁)
- 〈資本主義発展期の世界―一九世紀後半〉(②二頁、③四頁)
- ・ フランス、イタリア、ドイツ、アメリカ合衆国(①三頁、②四頁、③四頁)
 - ・ 発達した資本主義と帝国主義(①三頁、②四頁、③四頁)
 - ・ 第二次産業革命(①四頁、②六頁、③四頁)
- 〈資本主義発展期のクロアチア―一九世紀後半〉(②二頁、③四頁)
- ・ 新絶対主義とウィーンによる近代化の試みとイエラチチ総督の行動(①五頁、②五頁、③六頁)
 - ・ 帰路に立つクロアチアとオーストリアかハンガリーか、一八六一年のクロアチア議会(①四頁、②四頁、③四頁)
-
- ・ クロアチアとハンガリー協定(ナゴドバ)(①三頁、②四頁、③四頁)
 - ・ ダルマチアとイストリアにおけるクロアチア民族再生(①二頁、②三頁、③四頁)
 - ・ 近代クロアチアの発展―イヴァン・マジュラニチ総督(①三頁、②四頁、③四頁)
 - ・ 一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのクロアチア(①三頁、②四頁、③四頁)
 - ・ クロアチア国外のクロアチア人による民族再生(①二頁、②三頁、③二頁)
 - ・ ダルマチアとイストリアにおけるクロアチア民族再生のさらなる発展(①三頁、②三頁、③四頁)
 - ・ クロアチアにおける「第四階級」の地位、カトリック教会と労働者たち(①二頁、②三頁、③二頁)
 - ・ 一九〇三―〇四年の政治運動、クエン総督の失墜、「新路線」(①四頁、②三頁、③四頁)
 - ・ オーストリアとハンガリー政権とボスニア・ヘルツェゴヴィナのクロアチア人(①二頁、②三頁、③四頁)
 - ・ ボスニア・ヘルツェゴヴィナのクロアチア人の政治運動(①二頁、②三頁、③二頁)
- 〈第一次世界大戦前夜の諸事件、バルカン戦争〉(②二頁、③二頁)
- ・ 世界対立の序章としての第一次・第二次バルカン戦争(①二頁、

②四頁)

〈第一次世界大戦〉(③四頁)

・戦争の原因、契機、一九一七年までの動向(①二頁、②六頁、③六頁)

・一九一七年から一八年にかけての戦争の動向、中央同盟側の降伏(①三頁、②五頁、③六頁)

・第一次世界大戦中のクロアチア民族(①三頁、②五頁、③四頁)

教科書に占めるクロアチア国民史に該当する部分の比率は、アルファ社が約五九%、プロフィール社が約五三%、シュコルスカ・クニガ社が約五五%といずれも非常に高い(クロアチア国外のクロアチア人に関する記述を除く)。これは学習指導要領が「国民史」と「世界史」の目安を六〇%・四〇%としたことによる結果だが、戦争状態が続く中でクロアチア・ナシヨナリズムが高揚していた(称揚させられていた)当時の社会状況を反映しているとも言える。なお、「アルプスⅡバルカン地域」史(バルカン戦争を含めない)はいずれも一〇%程度であり、旧ユーゴスラヴィア時代の教科書におけるセルビア史の記述より少なくなった(セルビア史は二〜三%程度まで激減)。クロアチアとは隣接していない唯一の旧ユーゴスラヴィア連邦構成共和国であるマケドニアの近代史に関する記述は教科書からほぼ一掃された(かつては三%程度あった)。

このほか、「ユーゴスラヴィア思想の発達と第一次世界大戦前の民族問題」や「ユーゴスラヴィアの民族体による民族運動と再生」といった単

元も、当然のごとく削除された。現実的にはセルビア人が「少数民族」として問題化していたが、教科書には彼らの姿を見出すことはできない。オーストリア(ブルゲンラント)、南ハンガリー、ヴォイヴォディナなどに住む「クロアチア国外のクロアチア人」に関する単元、それとは別に「ボスニア・ヘルツェゴヴィナのクロアチア人」に関する単元が新設されたことと対照的である。

なお、二〇〇一年度以降、次々と新しい歴史教科書が出版されるようになり(同一出版社から二種類の教科書が出版されることも珍しくなくなった)、ユニークな教科書作成の試みが見られるようになった。例えば、プロフィール社で二冊目となる小学校七年生向け歴史教科書の場合、各単元が四〜六頁、全四〇単元で構成されているが、各単元の本文は一頁に満たず、残りの大半を「史料」「図版」とその解説が占め、児童・生徒に自ら考えることを促すものとなっている⁴⁰⁾。この教科書は後述する「クロアチア国家(国民)教育基準」に準拠した改版を行い、現在でも一定のシェアを確保している。

四 教科書における近代史(3)「教育基準」以降

二〇〇六年、クロアチア科学・教育・スポーツ省は「クロアチア国家(国民)教育基準」(HINOS: Hrvatski nacionalni obrazovni standard)に基づき新たな小学校向け学習指導要領を導入した⁴¹⁾。学習指導要領の改訂に伴い、多くの歴史教科書が改版された。新たな学習指導要領は「単元」

ではなく「主題」のみを提示した簡潔なもので、教科書執筆者にとって自由裁量の幅が大きく広がった。また、これ以降、教科書から「アルプス・バルカン地域」という地域概念が消えたほか、ヨーロッパ史（あるいは世界史）とクロアチア共和国・民族の歴史を必ずしも明確には区別しない構成をとるようになった。例えば、小学校七年生向け「歴史」の学習指導要領に基づく「主題」および主要教科書における記述分量（頁数）は次の通りである（①はアルファ社、②はシュコルスカ・クニガ社のもの）¹²。

- (一) 近代黎明期の世界とクロアチア (①一二頁、②二七頁)
- (二) 近代社会の形成、科学・技術・産業革命 (①一八頁、②一八頁)
- (三) フランス革命からウィーン会議までのヨーロッパ (一七八九〜一八二五年) (①一六頁、②二二頁)
- (四) クロアチア民族再生とヨーロッパにおける近代的国民の出現 (①一八頁、②二六頁)
- (五) ヨーロッパとクロアチアにおける一八四八年革命 (①一六頁、②二〇頁)
- (六) 一九世紀前半の社会・文化と日常生活の変化 (①一二頁、②二二頁)
- (七) 絶頂期のヨーロッパとヨーロッパにおける近代国家の形成 (①一八頁、②一六頁)
- (八) 一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけてのハプスブルク（オース

トリア・ハンガリー）帝国におけるクロアチア (①三六頁、②二二頁)

(九) 一九世紀ヨーロッパ優位時代の世界 (①二六頁、②一四頁)

(一〇) 一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけての社会・文化と日常生活の変化 (①二四頁、②一六頁)

(一一) 世界危機と第一次世界大戦 (①一二頁、②二〇頁)

これらの教科書は各「主題」に割り振った分量に明らかな違いが見られるだけでなく、クロアチア国民史の比率に焦点を絞ると、アルファ社が約四五%、シュコルカ・クニガ社が約三二%と大きな開きがあった。

なお、同じ時期に刊行された他の旧ユーゴスラヴィア諸国の歴史教科書に占める各「国民史」に該当する部分は、セルビアが約三九%¹³、モンテネグロが約四一%¹⁴、ボスニア・ヘルツェゴヴィナが約三七%¹⁵、スロヴェニアが約三〇%¹⁶となっており、その範囲を大きく逸脱するものではない（クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、スロヴェニアでは複数の教科書が存在するので、必ずしも一般化できない）。いずれにせよ、「世界史」と「国民史」の比率が逆転したことは確かである。なお、クロアチア以外の旧ユーゴスラヴィア連邦構成共和国・民族の歴史に関しては、「東方危機」や「バルカン戦争」など「世界史」的事件を除けば、ほとんど触れられていない（ボスニア・ヘルツェゴヴィナ史に関する記述がやや多い）。

なお、学習指導要領の「主題」には明示されていないものの、オース

トリア（ブルゲンラント）、南ハンガリー、ヴォイヴォディナ、ボスニア・ヘルツェゴヴィナなど「クロアチア国外のクロアチア人」に関する記述は従来と変わらず一定の分量を占めている。このほか、アメリカ合衆国などへの「クロアチア移民」に関する記述もあり、とくにアルファ社の場合は独自の項目を立て、移民の理由、主な移民先、職種などの特徴、移民団体などの紹介に二頁を割いている。また、シュコルスカ・クニガ社の教科書は、独自の項目として「クロアチアの少数民族」を立て、セルビア人とイタリア人の事例を取り上げている。それは、旧ユーゴスラヴィア連邦時代にクロアチア人と完全に対等の主要民族として位置づけられていたクロアチア国内のセルビア人が「少数民族」に転落したことを告げるものであり、「我々は少数民族という概念を用いない」と宣言していた一九八〇年代の教科書とは対照的である。

このほか、従来の政治・軍事史に偏った記述をあらためるべく、「社会・文化と日常生活の変化」という主題を盛り込み、相当の分量を割いていることも特徴の一つである。これまで科学・技術上の発明・発見に比べてほとんど顧みられなかった外国文学・芸術作品も図版とともに取り上げられている。ただし、アルファ社の記述が印象派など主として西ヨーロッパの近代芸術の動向にとどまっているのに対して、シュコルスカ・クニガ社の記述はリアリズムからモダニズムに至る文学・芸術運動をクロアチア人との関わりを含めて俯瞰しており、両者の共通性は乏しい。

なお、「クロアチア国家（国民）教育基準」は中等学校には適用され

ず、学習指導要領の改訂も明らかにされていない。その点では、一九九〇年代の歴史教科書のネガティブな側面を継承したままの部分もあり、早急に改善することが望まれる。参考までに、ギムナジウム三年生向け歴史教科書（近世・近代史）におけるクロアチア国民史の比率は、シュコルスカ・クニガ社（二〇〇八年）が二九％、アルファ社（二〇〇九年）が五五％と大きく異なり、その方向性も判別しにくい。¹⁷ 今後、さらに詳細に分析する必要がある。

むすびにかえて

本稿では、クロアチアの学校向け歴史教科書における近代史に関する記述の変化を辿りつつ、その特徴と問題点を明らかにしてきた。とくに一九九〇年代の歴史教育・教科書は「狭隘な民族的歴史観」を押し付けるものであったことが、教科書記述の分析からも明白となった。現在では新たな学習指導要領の方針に沿って歴史教科書の記述も多様化しているが、文化史・社会経済史に関する記述や「少数民族」に関する記述など、さらに改善すべき点も少なくないように思われる。

翻って日本の歴史教育・教科書の実情を考えると、とくに中学校社会科歴史的分野において、日本史（国民史）以外の記述が極端に少ないことに違和感を覚える。「歴史教育は、時代の進行とともに世界史を削減して日本史を主体とする内容にその姿を変えて」¹⁸ いった結果である。レベルの違いはあるものの、小学校とギムナジウムでほぼ同じ範囲の学習を

繰り返すクロアチアのモデルが優れているとまでは言えないかも知れないが、中学校と高等学校における「歴史」の学習がまったく異なるものとなっていることは、やはり問題であろう。社会科学から地理歴史科への接続についても、あらためて考え直す必要があるのではないか。学校教育制度改革を繰り返す旧ユーゴスラヴィア諸国の事例は、その意味でも大いに参考になると考えられる。

なお、本稿は「平成二十一年度跡見学園留学助成費」による研究成果の一部である。ご指導・ご助言を賜った跡見学園女子大学、東京大学、筑波大学、ザグレブ大学の諸先生方に御礼申し上げたい。

注

- (1) 近藤孝弘『国際歴史教科書対話 ヨーロッパにおける過去の再編』（中公新書、二〇〇五年）。
- (2) ベーター・ガイス、ギョーム・ル・カントレック監修（福井憲彦・近藤孝弘監訳）『ドイツ・フランス共通歴史教科書【現代史】——一九四五年以後のヨーロッパと世界（世界の教科書シリーズ二三）』（明石書店、二〇〇八年）。
- (3) 日本でもこの共通歴史教科書に対する関心は高く、日本西洋史学会第六〇回大会（二〇一〇年）では「ドイツ・フランス共通歴史教科書の射程」と題するシンポジウムが開催された。
- (4) Dragutin Franković, ur., *Povijest školstva i pedagogije u Hrvatskoj*, Zagreb: Pedagoško-književni zbor, 1958.
- (5) Ivo Goldstein, Agneza Szabo, *Povijest zagrebačke klasične gimnazije (1607.-2007.)*, Zagreb: Liber, 2007; Ivan Banić, ur., *300. obljetnica splitskoga sjemeništa i klasične gimnazije (1700. - 2000.): zbornik radova*, Split: Crkva u svijetu,

Nadbiškupsko sjemenište, 2000.

- (6) *Anali za povijest odgoja*, Zagreb: Hrvatski školski muzej, 1992.
- (7) Ante Selak, ur., *Hrvatski srednjoškolski vodič*, Zagreb: Školske novine, Pergamena, 1996; Zvonimir Marinčić, ur., *Hrvatsko srednje školstvo*, Zagreb: Croatia-projekt, 1997; Dragutin Rosandić, *Hrvatsko školstvo u obruzju politike*, Zagreb: Školska knjiga, 2005; Stjepan Puškar, *Hrvatsko osnovno školstvo*, Zagreb: Školska knjiga, 2006.
- (8) Wolfgang Höpken, "History Education and Yugoslavia (Dis-)Integration," in: Melissa K. Bokoroy, Jill A. Irvine, Carol S. Lilly, eds., *State-Society Relations in Yugoslavia, 1945-1992*, London: Macmillan, 1997; Ibid., "War, Memory, and Education in a Fragmented Society: The Case of Yugoslavia," *East European Politics & Societies*, Volume 13 (1), 1998.
- (9) *Povijest u Nastani*, Zagreb: Društvo za hrvatsku povjesnicu, 2003.
- (10) *Dijalog povijesničara - istoričara*, Zagreb: Zaklada Friedrich Naumann, 2000.
- (11) Christina Koulouri, ed., *Chio in the Balkans: The Politics of History Education*, Thessaloniki: Center for Democracy and Reconciliation in Southeast Europe, 2002; Magdalena Najbar-Agrčić, ur., *Klio na Balkanu: Usmjerenja i pristupi u nastavi povijesti*, Zagreb: Srednja Europa, 2005.
- (12) Sabrina P. Ramet, Davorka Matić, ur., *Demokratska tranzicija u Hrvatskoj: transformacija vrijednosti, obrazovanje, mediji*, Zagreb: Alinea, 2006; Sabrina P. Ramet, Davorka Matić, eds., *Democratic transition in Croatia: value transformation, education & media*, College Station: Texas A&M University Press, 2007.
- (13) Snježana Koren, "Minorities in Croatian history and geography textbooks," *Internationale Schulbuchforschung / International Textbook Research*, Jahrg./Vol.23, Hannover, 2001; Snježana Koren, Magdalena Najbar-Agrčić, "Silka naroda s prostora prijašnje Jugoslavije u hrvatskim udžbenicima povijesti," *Dijalog*

- pojivisničara - istoričara*, 6, Zagreb, 2002; Snježana Koren, "Manjine u Hrvatskim udžbenična povijesti i zemljopisa," *Povijest u nastavi*, god.1, Zagreb, 2003.
- (14) Alex J. Bellamy, *The Formation of Croatian National Identity. A Centuries-old Dream?*, Manchester and New York: Manchester University Press, 2003; Gordana Uzelac, *The Development of the Croatian Nation. An Historical and Sociological Analysis*, Lewiston - Queenston - Lampeter: The Edwin Mellen Press, 2006.
- (15) 石田信一「クロアチアにおける歴史教育と歴史教科書」『跡見学園女子大学紀要』三八(二〇〇五年)、同「クロアチアにおける学習指導要領と現代史教育」『跡見学園女子大学人文学フォーラム』四(二〇〇六年)、同「クロアチアにおける教育制度の変遷—歴史教育を中心に」『跡見学園女子大学人文学フォーラム』六(二〇〇八年)。一九八〇年代初頭までの旧ユーゴスラヴィア連邦の教育制度・教育事情に関しては、小山洋司「ユーゴスラヴィアの教育事情」『季刊教育法』四二・四三(一九八二—一九八三年)、同「ユーゴスラヴィアにおける自主管理利益共同体(SIZ)の理念と現状—とくに教育分野の場合—」『高知論叢(社会科学)』一一(一九八二年)が参考になる。
- (16) 柴宜弘「バルカンで進む歴史副教材の出版」『歴史評論』六三二(二〇〇一年)、同「歴史・教科書問題—バルカンで進む歴史教科書を通じての和解の試み」『立命館言語文化研究』一五(二)(二〇〇三年)など。
- (17) 「バルカン—ヨーロッパを考える一つの視座」(二〇〇三年三月)、同「地域史の可能性を求めて—バルカンと東アジアの歴史教科書から」(二〇〇五年一月)、『「地域史」をどのように構想・叙述し、どのように教育するか—バルカンと東アジアの事例から」(二〇〇七年一月)。いずれも東京大学駒場キャンパスで開催。
- (18) 柴宜弘編『バルカン史と歴史教育「地域史」とアイデンティティの模索』(明石書店、二〇〇八年)。スニェジャナ・コレン「教科書の中の地域史—クロアチアの事例—」ブレドドラグ・マルコヴィチ「セルビアの教科書における地域史—隣人たちの沈黙—」ソニーニャ・ドゥイモヴィチ「ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける歴史教育」ペテル・ヴォドビヴェツ「一九九〇年以降のスロヴェニアの歴史教科書」など現地専門家による刺激的な論考が多数掲載されている。
- (19) Danica Nola, ur., *Osnovna škola – odgojno obrazovna struktura*, II, redigirano izdanje, Zagreb: Školska knjiga, 1964, str.114-124.
- (20) Ivo Makek, *Prošlost i sadašnjost 1 : udžbenik povijesti za VI. razred osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 1963; Olga Salzer, *Prošlost i sadašnjost 2 : udžbenik povijesti za VII. razred osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 1961; Šarolta Duranović, Mirko Žeželj, *Prošlost i sadašnjost 3 : udžbenik povijesti za VIII. razred osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 1963.
- (21) Zlatko Muhvić, ur., *Naša osnovna škola : odgojno-obrazovna struktura*, 2, neizmijeneno izdanje, Zagreb: Školska knjiga, 1974, str.133-155.
- (22) Blagota Drašković, Ivo Makek, *Narodi u prostoru i vremenu 1 : udžbenik povijesti za V. razred osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 1975; Ivo Makek, Blagota Drašković, Olga Salzer, *Narodi u prostoru i vremenu 2 : udžbenik povijesti za VI. razred osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 1974; Olga Salzer, Rene Lovrenčić, *Narodi u prostoru i vremenu 3 : udžbenik povijesti za VII. razred osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 1974; Ivan Jelić, Radovan Vukadinović, Dušan Bihančić, *Narodi u prostoru i vremenu 4 : udžbenik povijesti za VIII. razred osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 1975; Blagota Drašković, Čovjek u svom vremenu 1 : udžbenik povijesti za 5. razred osnovne škole, Zagreb: Školska knjiga, 1985; Ivo Makek, Josip Adameček, *Čovjek u svom vremenu 2 : udžbenik povijesti za 6. razred osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 1985; Dragutin Pavličević, Filip Potrebica, Rene Lovrenčić, *Čovjek u svom vremenu 3 : udžbenik povijesti za 7. razred osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 1986; Rene

- Lovrenčić, Ivo Jelić, Radovan Vukadinović, Dušan Biliandžić, Čovjek u svom vremenu 4 : udžbenik povijesti za 8. razred osnovne škole, Zagreb: Školska knjiga, 1987.
- (33) Marija Vrbečić, *Historija : za 1. razred gimnazije*, Zagreb: Školska knjiga, 1961; Mirko Žeželj, *Historija : za 2. razred gimnazije*, Zagreb: Školska knjiga, 1962; Mirjana Gross, *19. stoljeće : historija za III razred gimnazije*, Zagreb: Školska knjiga, 1962; Ivo Perić, *Povijest : udžbenik za IV razred gimnazije*, Zagreb: Školska knjiga, 1971.
- (24) 小山洋司「ユーゴスラヴィアの教育事情(2)」『季刊教育法』四三号(一九八二)一四二—一五五頁参照。
- (32) Hrvoje Matković, *Povijest 1 : za srednje škole*, Zagreb: Školska knjiga, 1976; Tomo Čubelčić, Dragutin Pavličević, *Povijest 2 : udžbenik za srednje škole*, Zagreb: Školska knjiga, 1976; Dušan Biliandžić, Ivan Jelić, Hrvoje Matković, Dragutin Pavličević, Nikša Stančić, Radovan Vukadinović, *Povijest 2 : udžbenik za usmjereno obrazovanje*, Zagreb: Školska knjiga, 1986.
- (26) Julijo Martinić, ur., *Gimnazije u Osijeku : ravnatelji, profesori i maturanti : 1729. – 2000.*, Osijek: Hrvatska akademija znanosti i umjetnosti, Zavod za znanstveni rad i umjetnički rad u Osijeku, 2001, str.28.
- (27) *Jugoslavija 1918-1988: statistički godišnjak*, Beograd: Savezni zavod za statistiku, 1989, str.360.
- (31) *Statistički biltenis hrvatskih županija 1993*, Zagreb: Državni zavod za statistiku, 1994, str.266, 271.
- (32) *Statistički biltenis 2009*, Zagreb: Državni zavod za statistiku, 2009, str.457.
- (33) Dragutin Pavličević, Filip Potrebia, Rene Lovrenčić, *Čovjek u svom vremenu: udžbenik povijesti za VII. razred osnovne škole*, 3. izdanje, Zagreb: Školska knjiga, 1988(1986); Milutin Perović, Milo Strugar, *Istorija za VII razred osnovne škole*, 5. izdanje, Beograd: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva, 1991(1987).
- (31) Dragutin Pavličević i dr., *n.d.*, str.188.
- (32) Milutin Perović i dr., *n.d.*, str.172.
- (33) Dragutin Pavličević i dr., *n.d.*, str.194.
- (34) スニエシヤナ・コレン「教科書の中の地域史—クロアチアの事例—柴宜弘編『バルカン史と歴史教育』一二五頁。
- (35) スニエシヤナ・コレン「教科書の中の地域史」一三四頁。
- (36) 一九九二年の時点では、なお「近隣の南スラヴ諸地域」というユーゴスラヴィアのともいえる単元名が残っていた。
- (37) スニエシヤナ・コレン「教科書の中の地域史」一三四頁。
- (38) 「Учебне Наставни план и програм за основну школу, Zagreb: Ministarstvo prosvjete i športa, 1999を参照してください。なお一九九〇年代から二〇〇〇年代半ばにかけての小学校向け学習指導要領「歴史」の変化の詳細については、Snježana Koren, “Promjene u nastavnom planu i programu za osnovne škole u Republici Hrvatskoj tijekom posljednjeg desetljeća,” *Povijest u nastavi*, god.1, br.2, Zagreb, 2003を参照してください。
- (39) Filip Potrebia, Dragutin Pavličević, *Povijesti za VII. razred osnovne škole*, 3. izdanje, Zagreb: Alfa, 1998(1996); Damir Agičić, *Povijest 7: udžbenik za sedmi razred osnovne škole*, 5. izdanje, Zagreb: Profil, 2004(1998); Ivan Dukić, Kresimir Erdelja, Igor Stojaković, *Povijest 7: udžbenik povijesti za sedmi razred osnovne škole*, V. izdanje, Zagreb: Školska knjiga, 2004(2000).
- (40) Damir Agičić, Snježana Koren, Magdalena Najbar-Agičić, *Povijest za sedmi razred osnovne škole*, 4. izdanje, Zagreb: Profil, 2004(2001);
- (41) *Nastavni plan i program za osnovnu školu*, Zagreb: Ministarstvo znanosti, obrazovanja i športa, 2006.
- (42) Stjepan Bekavac, Siniša Kljajić, *Povijest 7: udžbenik za sedmi razred osnovne*

- škole, 1. izdanje, Zagreb: Alfa, 2007.; Krešimir Erdelja, Igor Stojaković, *Tragom prošlosti: udžbenik povijesti za sedmi razred osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 2007.
- (43) Radoš Ljubić, *Istorija za sedmi razred osnovne škole*, Beograd: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva, 2004.
- (44) Živko M. Andrijašević, Saji Šabotić, Dragutin Papović, Slobodan Drobnjak, *Istorija za osmi razred devetogodišnje osnovne škole*, Podgorica: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva, 2007.
- (45) Hadžija Hadžibabić, Edis Dervišagić, *Historija: udžbenik za sedmi razred osnovne škole*, Tuzla: Bosanska knjiga, 2007.
- (46) Anita Mirjanić, Jelka Razpotnik, Damjan Snoj, Helena Verdev, Anka Zuljan, *Raziskujem preteklost 8: učbenik za zgodovino za 8. razred osnovne šole*, Ljubljana: Rokus, 2006.
- (47) Ivan Dukić, *Koraci kroz vrijeme III: udžbenik povijesti za 3. razred gimnazije*, Zagreb: Školska knjiga, 2008.; Stjepan Bekavac, Robert Skenderović, *Povijest 3: udžbenik za 3. razred gimnazije*, Zagreb: Alfa, 2009.
- (48) 鈴木久男『世界史を取り戻そう 消えていく前近代世界（イスラーム、中世ヨーロッパ）』（一橋大学、二〇〇七年）五頁。同書（同頁）によれば、教科書（中学校社会科歴史的分野）における世界史的内容の割合は、一九八〇年頃までは三〇%を超えていたが、現在では半減している。